

# 電動車椅子常用児童を対象としたインクルーシブ体育実践 に関する研究

加地 信幸<sup>\*1</sup>・河野 喬<sup>\*2</sup>

## Inclusive physical education of children in electric wheelchairs

Nobuyuki KAJI・Takashi KAWANO

This paper is a practical report on the inclusive physical education of primary school children with physical disabilities. The report focused on adapted sports such as swimming, warming-up exercises, the horizontal bar, jogging, soccer, and tag rugby. The results showed that apart from an overall better appreciation for such activities, children with physical disabilities showed an increased enthusiasm and better bonding with other kids.

### Key Words (キーワード) :

Para-Sports (障害者スポーツ), Adapted sports (アダプテッド・スポーツ), Inclusive Physical Education (インクルーシブ体育), Children with Physical Disabilities (肢体不自由児), electric wheelchair (電動車椅子)

## 1. 問題と背景

すべての子どもは誰であれ、教育を受ける権利をもつ、という考えから示された「サマランカ声明」(UNESCO,1994)以降、学校現場におけるインクルーシブ教育の導入が進んでいる。その一つである「インクルーシブ体育」は、障害のある子と障害のない子が同じ集団の中で行う体育を指している(草野ら, 2007)。

長曾我部(2006)は、健常児と障害児の間に生じる「まさつ」を通して、健常児が障害児に対する適切な接し方を修得するということ、そのためには教師が学習者全員の参加を可能とするよう工夫すること、健常児と障害児が関わる場面を作る等の配慮を行うことが必要であることを指摘している。また、草野ら(2001)は、通常学級の担当

教員が体育実践を成立させることが難しいことや、障害のある児童生徒と障害の無い児童生徒と共に充足させることの難しさを指摘している。

そこで、子どもの障害実態に応じて、新たな「アダプテッド・スポーツ(adapted sport)活動」を考案し、健常児と障害児が共に学べる体育実践について検討を行った。

## 2. 方法

### (1) 概要

本研究は、小学校の通常学級に在籍する肢体不自由のある児童が、通常学級の児童と共にできる体育実践、具体的には、①プール運動、②準備運動、③鉄棒運動、④ジョギング、⑤サッカー、⑥タグラグビー、の6つを成立させるために考案し

<sup>\*1</sup> 重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」代表

<sup>\*2</sup> 広島文化学園大学 社会情報学部

たルールや工夫した用具の提示と、具体的に指導・助言を重ねながら小学校のH教諭と共に作り上げた指導の実際等について検討を行った。

## (2) 実施期間

平成23年7月13日, 11月22日, 12月7日, 平成24年1月17日, 2月7日, 2月22日, 3月13日の合計7日間(平成24年1月24日も予定していたが, インフルエンザによる学級閉鎖のため中止)

## (3) 対象者

本研究で対象としている児童1名(以下, 児童Y)は, 小学校3年(通常学級)に在籍している。障害については, 身体障害者手帳1級を所持, メロシン欠損型先天性筋ジストロフィーと診断されている。当該学級には, 担任H教諭(1名)のほか, 主に児童Yに直接的な支援を行う特別支援教育支援員が1名いる。

学校や日常生活では, 平成23年度(小学校3年生になってから), 電動車椅子の使用を開始したばかりであるが, 走行に関する操作性は概ね高い。食事の際は, 自分でフォークやスプーンを握り, テーブルに肘をついて食べることができる。鉛筆を握っての書字や, ハサミを使って薄い紙を切ることも可能である。リコーダー演奏では, 低い「ド」「レ」の音以外は指をしっかりと押さえて楽曲を演奏することも可能である。衣服着脱と排泄については概ね全介助で行っている。

なお, 本研究の公表については, 対象児童の保護者より承諾を得ている。

## 3. 結果及び考察

### (1) プール運動

#### 1) 主な指導・助言内容

児童Yは, 就学以来, 水深55cmの浅いプールのサイドに座り, 足先だけをつける活動のみを行ってきた。それまで学校としては, 25mプールに入っ

ての学習活動を行う発想は全くなかった。筆者は, 児童Yに「大きなプールへ入ってみよう?」とはじめに言葉かけを行った。児童Yは,

「いや」「怖い」と小さく首を振りながらわずかにささやいた。その後, 学習する内容を伝え, 25mのプールサイドと一緒に座り, 膝下のみをプールにいれてバタバタと動かすことからはじめた。

次に, 筆者は児童Yを横抱きのまま下肢→体幹→肩と徐々に水につかっていくことで, 水に慣れるよう支援した。その後, エアレックスマット上にラッサルフロートクッションを枕にし, 仰臥位にて一人浮きにチャレンジしてみた。はじめは「こわい!」「いや!」と小声を出し続けていたが, しばらくすると慣れはじめ, 声も止まった。

次に, 小学校で体育実践を行う際には, 実際にはエアレックスマットやラッサルフロートクッションが無いため, (A)～(F)の直接介助の指導法を伝えた。なお, (A)～(F)については, すべて筆者が実際に指導・助言を行った後, 日ごろ児童Yの直接指導に携わっている特別支援教育支援員が支援にあたるようにした。

(A) 指導者の大腿部上に腰掛けた, 後方上肢介助による水かき運動(片手ずつ左右→上下)。自力のみでは運動が弱いため, はじめは後方よりしっかりと指導者がサポートし, 水の圧や波の動きをしっかりと感じ取ることのできる上肢の動きとなるようサポートする。児童Yは, 自分が動かした上肢により, 前方の特別支援教育支援員の顔に水がかかることが楽しく, 積極的に行っていた。

(B) 指導者の大腿部上に腰掛けた, 自力による水かき運動。しっかりと介助を受けて上肢運動を行ったことにより, 指導者との上肢運動前よりも自力での運動量が大きくなった。

(C) 指導者の大腿部上に腰掛けた, 後方上肢介助によるバタ足運動(片足ずつ左右)。左股関節を指導者の左手でサポートし, 左膝裏あたりを指導者の右手でサポートし, 下肢の上下運動を行った(次いで右も同様)。

(D) 指導者の大腿部上に腰掛けた, 自力によるバタ足運動。児童Yは, 「バタバタ」という言葉かけに合わせて, 自分で両下肢交互バ

タ足運動を行っていた。

- (E) 児童Yの頭を肩に置いた介助背浮き。水にはすっかり慣れた様子で、概ねリラックスして左右へのゆっくりとした揺れ運動を行うことができた。
- (F) 児童Yの首をサポートした介助背浮き。児童Yは概ねリラックスし、指導者に身をあずけてくれる力があるため、首の後ろのみをサポートするだけで水に浮くことができることを伝え、実演した。その上で、首と腰廻りをサポートした介助背浮きの指導法を伝えた。最後に25mを往復し、児童Yは下肢をバタバタと自主的に動かしていた。

## 2) 指導・助言後の成果

児童Yは、はじめは水への恐怖心があったが、エアレックスマット等の活用により徐々に水に慣れていくことができた。最後は「疲れた」といいながらも筆者からの「やる？」という言葉かけに「うん」とうなずき、25mプールでの介助背浮きにも積極的になった。

筆者が指導・助言を行った当日は、3年生2クラスが合同で体育実践が行われており、大勢の児童がプールに集まっていた。いつも小さなプールサイドに腰掛け、足だけつけている児童Yの姿しか見たことのない児童にとって、25m介助背浮きをしながら水に浮いて、自主的に手足を動かす姿を目にするのは初めてのことであった。多くの児童から「すごい!」「がんばれ〜!」等の声援を受けた。児童Yは、2クラスの児童がプールサイドで見守る中で、25m介助背浮きで泳ぎ切り、ゴールした瞬間にはみんなから一斉に拍手されるという感動的な場面となった。校長先生と保護者も終始見学され、児童Yがやる気になって大きなプールで指導者と泳ぐ姿に感動されていた。保護者は、今後も学校以外でもプール運動に取り組んでみたいと言われていた。

## (2) 準備運動

### 1) 主な指導・助言内容について

児童Yは、就学以来、車椅子からおりて体操を

することはこれまでなく、車椅子乗車のままで上肢の軽い運動を行う程度であった。また、それまで学校としては「怪我の心配もあるし、どこまでやっていいものか分からなかった」という状況だった。そこで、筆者はまず車椅子からおりてエアレックスマット上での準備運動を試みた。

はじめに、児童Yのあぐら座位姿勢を観察してみた。上肢を引き上げる際、肩関節を上を持ち上げてなんとか手のひらが胸辺りの高さまで上げることが可能であった。実際には、上肢の活動の際には、かなり僧房筋(上部繊維)への負担が大きく、筋全体が短縮した状態が長く続いている様子だった。児童Yは、なんとか坐骨を支点とした座位姿勢は保持できるものの、左坐骨優位の座位姿勢をとっていた。脊柱伸展位が保持しにくく、下顎が突き出た形となりやすく、やや左凸の側湾となることが多い様子であった。よって、崩れた姿勢保持を長く続けないよう、後方介助による脊柱伸展位を保持するようにサポートを行った座位姿勢運動や、学習活動の前後に行える簡単な仰臥位または側臥位による僧房筋や肩甲骨周辺のストレッチ、腰背部・股関節・肩関節・上肢等の運動・ストレッチや関節可動域運動等について伝えた。

次に、筆者の大腿部上で児童Yが腹臥位になった際の肩関節加重運動を行った。その際、児童Yは「この姿勢にはなったことがない」と言っていたが、概ねリラックスして腰背部の運動や腕支持姿勢を保持することができていた。このことからすると、指導者に身をあずけて運動・ストレッチに取り組める力は高いと感じた。

次いで、後方の指導者から支援を受けた、体幹伸展位キープや体幹を多様に動かす運動、肩関節を支点とした上肢運動等、ベンチ椅子座位による準備運動を試みた。上肢を動かし始める所、体幹を傾け始める所では、児童Yがわずかな力で運動・動作をスタートさせることが可能なので、スタートし始めた動きに合わせて運動・動作が静止してしまわないように、後方からサポートするよう支援を行うことがポイントとなることを伝えた。最後に特別支援教育支援員も実際に児童Yと体操を行った。指導・助言後、学校から「児童Y

にあったベンチ椅子を作製したい」と提案が出た。その後、H教諭が校内の用務員に作製を依頼し、ベンチイスが作製された。

筆者がその後指導・助言に訪問した際には、小学校で作製されたベンチ椅子を使って、クラスのみんなの列に入り、筆者と一緒にベンチイス体操を行った。児童Yは、後方からの言葉かけに合わせて、身体を少し横に傾けたり、前傾したり、手足を動かしたりできていた。日頃の指導では、この自主的な動きをいかした動き作りを行うことに加え、準備運動としての「しっかり動かす・伸ばす」といったポイントをおさえるよう伝えた。

なお、小学校で作製されたベンチ椅子の座面がニスの塗られた板面であるため、当初は運動時に児童Yのお尻が滑ってしまう課題があった。そのため、H教諭が用務員に改善を依頼したところ、ベンチ椅子の座面にカーペット生地素材のものが貼られ、木杵やタッカーで固定された。

## 2) 指導・助言後の成果

指導・助言を始めた当初から比較すると、はじめの準備運動の時点で大きく改善がみられた。以前はクラスの児童が準備体操を始めてからベンチ椅子に移乗し座りはじめていたため、体操へは途中参加となってしまう、運動量も不十分であった。また、クラスのメンバーが集まる場所に、児童Yと特別支援教育支援員が急いで駆けつけるといった形をとっていたため、慌しく準備運動に参加しなかった。

そこで、児童Yに配慮した準備運動が行えるよう、①児童Yがいる場所に集まる、②ベンチ椅子に座って準備が整ったら体操をスタートする、③児童が通常行う準備体操の動きに合わせた動きをきめておく、の3点について指導・助言を行った。

その結果改善がはかられ、準備運動が始まる前から児童Yと特別支援教育支援員がベンチ椅子に座り、軽く身体を動かしながら待機していた。そこへ他の児童が集まり体操が開始され、とてもスムーズに準備運動が行われていた。また、児童Yと特別支援教育支援員とで決めた体操の動きも行われていた(図1)。



図1 電動車椅子から降りて、指導者とベンチ椅子に座って体操をする児童Y

## (3) 鉄棒運動

### 1) 主な指導・助言内容について

実際に他の児童と同じような動き、つまり棒を力強く握り続けて身体を棒にまきつけての回転運動を行うといった学習をするのではなく、筆者は①棒を握り続ける、②棒を握って引き寄せる、③棒を握って上にあげる、④高い位置に手を伸ばして棒を握る、の4点等、車椅子に座ってできる上肢の動きを中心とした上半身全体の運動を行うことをねらいとしてはどうかということを伝えた。

実際の体育実践時には、他の児童が鉄棒運動を行う際の鉄棒に、長さ1m程度の軽い棒の両サイドにヒモを結び、鉄棒が滑車役となるようぶら下げる形で行う。鉄棒にぶら下がったヒモは、児童の膝上、手前、目線の位置、上方等、ヒモを引っ張ったり緩めたりすることでいろいろな高さ設定が可能となり、運動のバリエーションを拡大することが可能となる。

実際には、鉄棒に取り付ける荷締めベルト(1本198円、ホームセンターで購入可)を2本持参し支援を試みた。方法は、荷締めベルト(長さ約2m、幅約25mm)2本を使って、プラスチックバー(長さ約70cm、直径約4cm)を、鉄棒と平行位になるようつなげ、鉄棒が滑車役となるようぶら下げる形にする。鉄棒にぶら下がった荷締めベルトは、金属製のバックルがついており、ベルトを通したストッパーを押すことで緩めたり締めたりすることを容易とした。

## 2) 指導・助言後の成果

ベルトを引っ張ったり緩めたりすることで、児童の膝上、手前、目線の位置、上方等、握りやすい位置や少し難しい位置へバーを設定することが可能となった。

実際に児童Yは、正面のバーを自分で頑張って握り、手前や正面に繰り返し運動・動作を行うことができた(図2)。児童Yは、バーに対して手のひら全体で均一に握ることが難しく、特に小指側に向かって握る力が弱い。そのため、小指のほうにかけて力強く握るよう指導した。その後、5本指全面で握るよう頑張っていた。

次に手前にバーを引いたり、押し出したりする動きを指導した。押し出す際は鉄棒の真下まで、引く際は胸の前辺りまで運動するよう伝え、合わせて児童Yが運動回数を「5回」「10回」等と決めて行うようにした。3セット繰り返したところで、「手が疲れた」と言ったため、少し休みながら行った。休憩後、動きに慣れ始めてきたため、引きつける際は下顎まで引きつけ、可能な限りバーをキープするよう指導した。パワー的にバーを引きつけた下顎位置でのキープはやや難しそうだったが、一瞬であれば頑張ってキープできていた。

その後、クラス全員と鉄棒のテストに児童Yはチャレンジした。他の児童が一人ずつテストを行

い順番が来ると、当初は「5回頑張る」と申請していたが、本番では「10回にする」と意欲を見せた。児童Yのテストの際には、クラスの友達に回数を数えてもらいながら行った。児童Yは少々緊張したせいか、練習よりも動きが早くなったが、目標の10回を行うことができた。

## 3) 鉄棒補助具の活用

小学校の体育実践で使用されていた鉄棒補助具を使って、児童Yが鉄棒にぶら下がる感覚を学習することができるのではないかと考え、立案し実践を試みた。

体育実践で使用されていたものは、鉄棒補助具「鉄棒くるりんベルト」という商品名であった。実際に体育実践の様子を観察していると、この「鉄棒くるりんベルト」を使うことにより、鉄棒近くでの腰の固定が容易となり、指導者からのわずかな補助で、簡単に逆上することを可能としていた。また、技術が向上すると、指導者からの補助無しで逆上がりができる児童もいた。さらに、技術の高い児童は、ベルトを緩めて鉄棒との距離を長くして逆上がりができる児童もいた。この補助具を活用し、「逆上がりができた」という感覚を繰り返し体感することで、児童は逆上がりの基礎技能を楽しみながら獲得できているといった点で、大変有効なものであると感じた。また鉄棒とベルトがこすれあう部分には、体重80キロまでの人に対応できる強い素材のものが使用されており、小学生がベルトにぶら下がっても転落する心配はないという。

そこで、このベルトを鉄棒にぶら下げ、ベルトの腰を当てる箇所に児童Yが腰掛ける感じで座り、タオルを巻きつけた鉄棒に胸を当て、腕は前で組むようにして鉄棒へぶら下がるよう支援した。側方から、腰と大腿部(膝裏に近い位置)の2点をサポートし、前後に揺れる運動を指導した(図3)。揺れる範囲は、鉄棒から垂直位より前方に腰の位置が来ると、鉄棒にぶら下がっている体が滑り落ちる危険性があるため、鉄棒垂直位よりも後方から、体幹と地面が直角位の範囲で、揺れ運動を行うよう留意した。



図2 鉄棒からぶら下げた2本の荷締めベルトで固定したバーを使って、鉄棒運動をする児童Y



結果、児童Yは鉄棒に胸で体重を受けた、空中運動を可能とすることができた。また、児童Yは「怖くない」「大丈夫」という感想を言い、非日常の鉄棒運動に興味を示していた。既存の補助具を活用した運動指導ができた点で大変有効であった。



図3 鉄棒にぶら下げたベルトに腰かけた状態で、タオルを巻きつけた鉄棒に胸を当て、鉄棒へぶら下がって前後に揺れる鉄棒運動をする児童Y

#### (4) ジョギング

##### 1) 主な指導・助言内容について

児童Yは、体育館やグラウンドでジョギングする際に、電動車椅子に乗ってみんなについていていた。筆者は電動車椅子操作に慣れる点や、みんなと活動を共有している点では良い活動なので、そのまま継続しても良いのではないかと伝えた。

また、筆者は別の方法も提案した。全国身体障害者スポーツ大会の正式種目でもある、電動車椅子使用者が行っている種目に、スラロームと言われるものがある。30mのコースを電動車椅子でいかに速く走り抜けるかを競うもので、途中で置かれた障害物や旗門を、定められたとおりの手順で走るという種目である。また、途中の旗門や障害物は、車椅子が当たるとペナルティで2秒加算され、白いカラーコーンの間は前進で、赤いカラーコーンの間は後進で通過しなければならない。筆者はこの既存ルールを参考にして運動時の環境設定を行い、可能であれば毎回のタイムを計測することで、活動に対するモチベーションも高まり、技術向上へも意欲が増すので、活動の一つとして取り組んでみてはどうかと提案した。

実際の活動時には、児童Yがより目的を持って活動に取り組めるよう、走行コースを設定することを提案した。具体的には、全国身体障害者スポーツ大会の正式種目「スラローム」の設定・ルールを参考に設定した。コースの走行は、白いカラーコーンはジグザグ走を行い、4つの赤いカラーコーン間(四角)は後進で通過する(図4)。カラーコーンに触れた場合は1回につきプラス2秒加算とした。



図4 カラーコーンを使った電動車椅子用コースを走行する児童Y

##### 2) 指導・助言後の成果

スタートライン、ゴールラインを決め、タイムトライアルを行った結果、1回目の記録は45秒。比較的操作性が高く、スムーズに走ることができたため、カラーコーンの間隔を狭め2回目のタイムトライアルを行った。その結果、2分45秒となった。赤いカラーコーンを後進する際、何度も接触した。「今後、技術と記録向上を目標に、活動に取り組んでいきたい」との意気込みが見られた。

#### (5) サッカー

##### 1) 主な指導・助言内容について

筆者ははじめに、電動車椅子でボールをドリブル(押し出す)することを容易にする方法について検討することから始めた。実際に考案したのは、電動車椅子のフットプレート部に、タイヤを半分カットしたものを取り付けたり、木製のプレート(ボールが押し出せるように)を取り付けたりすることで、ボールをドリブルすることが可能にな

るのではないかと考えた。

そこで、電動車椅子サッカー競技で実際に使用されているフットガードをヒントに、ボールをキープしたまま走行可能となるよう考案した図面をH教諭に渡した。さっそくH教諭が用務員に作製を依頼し、図面をもとに木製のフットガードが作製された。

実際に木製フットガードを取り付けて実践を重ねてみると、木製フットガードと地面との間隔がやや狭いため、グラウンドのデコボコした箇所では木製フットガードが土にめり込んでしまうことが判明した。検証した結果、木製フットガードをもう5cm程度、底面のみをカットするとグラウンドに当たることなく走行できるのではないかということとなり、後日カットした(図5)。この結果、木製フットガードが実際の活動時に、グラウンドの土へ当たることなく、スムーズに走行できるようになった。



図5 電動車椅子に取り付けた木製フットガード

## 2) ボールドリブル運動について

ここでは、サッカー運動の実際についてふれる。細かいルールや展開方法については、児童Yの電動車椅子の操作性や、体力等を考慮した上で、ゲームの中へ共に参加できるような特別ルール(専用エリアの設置等)について、クラスみんなで話し合って決めることとなった。

当初、児童Yは、クラスみんなが並んで行っていた場所ではなく、1人別のラインで1列に並べられたカラーコーンでジグザグドリブルを行っていた。その様子を観察していると、木製フットガー

ドを取り付けたことで、走行中にボールが左右に転がって逃げてしまうこともなく、概ね正確に設置されたカラーコーンをジグザグに走ることができていた。そこで筆者は、クラスみんなと一緒に並んで、順番を待ち、みんなと同じ設定にチャレンジしてみてもどうかと提案した。実際に児童Yは、クラスみんなが並んでいる列に並び、順番を待ち、自分の番では概ね正確にドリブル走行することができた。他の児童からは「すごい!」と声をかけられ、児童Yは嬉しそうな表情をしていた。

次に、4～5名を1グループとして円形になりサッカーボールのパス練習も行った。当初、児童Yには殆どボールがまわってくることはなく、児童同士でボールの蹴り合いや奪い合いとなっていた。そこで私は、ボールをパスする順番(例えば、正面の人→右の人→正面の人)を決めて何回できるか行うようにすること伝えた。こうすることで確実に児童Yへもボールパスすることが可能となり、相手に正確にパスするという意識・技術が向上することが考えられたからである。

その後、訪問した際に観察すると、ボールをパスする順番を決めて、何回できるか行うように改善され、4名で円形になったボールパス練習が行われていた。児童の様子を観察していると、決められた相手に対して順番にボールをパスしようとする姿勢が見られるようになっていた。また、児童Yにも優しく丁寧にパスする児童の様子が見られた。時々、ボールがそれていくと、児童Y以外の3名が全員でボールを追っていくという場面も見られたが、きちんとはじめのポジションに戻り、再びパス練習を行うこともできていた。

## 3) ラインサッカー運動の指導・助言とルールの変化について

ルールや具体的な展開方法については、事前のH教諭との打ち合わせの中で、ある程度の案を伝え、その後はクラスの児童と話し合って決めておくという形を取った。

はじめに考案されたルールは、センターラインから約5mのエリア内に、他の児童が侵入できないYさんゾーンを設定し、児童Yがドリブル走行

している間はボールを奪うことはできないというものであった。実際に行った結果、殆どの児童がゲームに夢中となり、ボールに足で触れたり、蹴ったりしたい気持ちが高まり、児童Yは1度もボールに触れる機会がなかった。しかし、そのことを児童Yに尋ねると「ボールには触れなかったけど、みんなと一緒にゲームができたから楽しかった」とのコメントがあった。従来の見学者としての参加ではなく、共にコート内で活動できたことに対して嬉しいこと伝えてくれた。

その後、これまで行ってきたルールや具体的な展開方法等について、クラス全員で話し合い、どうしたら児童Yへ配慮したゲームができるかについて検討された。その結果考案されたのが図6-1に示したものである。具体的なルールは、児童YがYさんゾーン内でボールをキープして走行している間は誰も邪魔することができないというものであった。

実際のゲームを観察していると、児童Yはセンターライン付近で殆ど動かず、チームメンバーからのパスを待っていた。時々、メンバーがボールを渡しに近づいてきた。ボールをゆっくりと受けて攻撃方向へドリブル走行するが、エンドラインまで直進し、ゴールの後ろ側まで進んでしまった。軌道修正しゴール付近でシュートを試みるが、ゴールキーパーの児童が簡単にボールを奪い取ってしまった。その後、観察を続けると、児童同士のボールの争奪戦が続く、ゴール前でのシュートの結果、ボールがライン外の遠方に飛ん

でいき、それを拾いに走る場面が多かった。

そこで、児童がサイドライン等からボールをコート内に蹴り入れる際に、児童Yにゆっくりパスをしてはどうかと提案し、実際に行ってみた。また、児童Yにもボールの動きに合わせてYさんゾーンを自由に行き来してみるよう伝えた。その後、ボールがコート外に出た際、児童Yはボールを拾いに行き蹴り入れる児童のそばまで行き、ボールを受け取りドリブル走行した。相手ゴール付近からの走行であったため、かなりの長い距離のドリブル走行となったが、他の児童はYさんゾーン内には入らないよう留意しながらボールの近くまで寄り、児童Yのゴールを見届けた。実際のゴールでは相手キーパーに阻止されてしまったが、ゴールに向かって車椅子で走行するといった動作は可能となった。

今回のゲーム展開案を観察した結果、筆者は「今回は図6-2のような設定に変更してゲームを行って見てはどうか」と提案した。図6-1の主な改善点は、味方ゴール付近のYさんゾーンを無くして直線エリアに変更した。これは、ゲーム攻撃中に、児童Yが守備に回るという余裕がないことと、攻撃側に徹することで児童Yの動きが周囲の児童や児童Yにもわかりやすいと考えたからである。また、攻撃するゴール付近のYさんゾーンのラインが曖昧であったため、はっきりとラインを引き、ゴール付近のYさんゾーンを明確にした。これは、ゴールキーパーの児童がYさんゾーン内にも侵入し、児童Yのゴールを簡単に阻止していたためである。

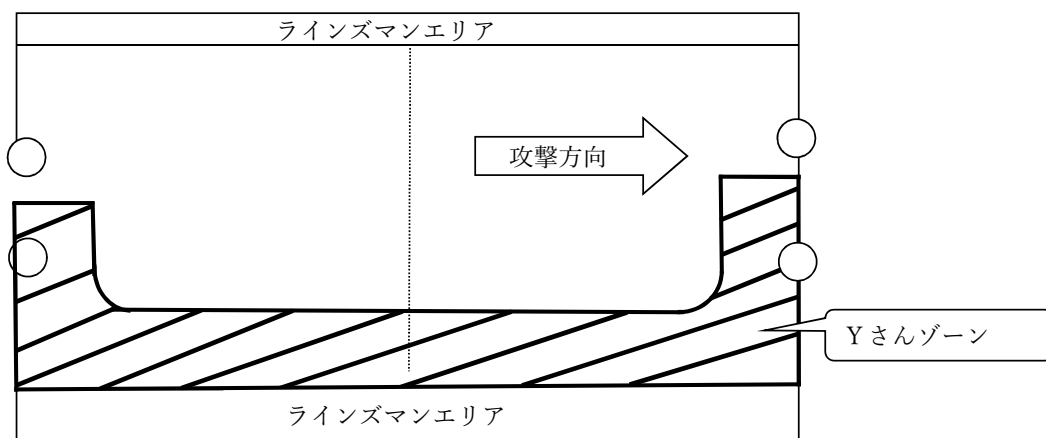


図6-1 ラインサッカー案1 (Yさんゾーン設定版)



ゲーム終了後、児童YとH教諭とで「ボールが木製フットガードに当たったらYさんボールってことにする？」と確認されたが、児童Yは「いや、きちんと木製フットガードの枠内で受け取ったら自分のボールということにする」と伝えてきた。当面は、これらのルールと設定によりゲームを繰り返すこととした。

その後も、これまで行ってきた指導・助言をもとに実践が繰り返され、若干のルールやYさんゾーンの変更等の工夫がされた。その結果、考案されたものが図6-3に示すような設定である。具体的な改善点は、Yさんゾーンが攻撃方向を中心に広げられ、守備側ゴール付近のYさんゾーンはカットされた。さらに、シュートするゴール付近のYさんゾーンがさらに拡張されていた。前回行った指導・助言後に3回実施され、この改善により児童Yは一度初ゴールできたという報告を受けた。

実践の様子を観察していると、児童Yへボール

がパスされ、Yさんゾーンを攻撃方向へ走行中に、他の児童がYさんゾーン内に入ってしまうようなこともなく、概ねスムーズに展開していた。

しかし、児童Yがシュートするゴール付近でのルール遵守の困難さが見られた。特に、ゴールキーパーの動きの理解が難しい様子であった。具体的には、「Yさんゾーン内に足をついてはいけない」「片足のみでYさんゾーン内の空中で阻止する行為は可能」ということが児童にとって理解しにくかったようである。そこで、「片足のみはYさんゾーン内に入れても良い、Yさんゾーン内の地面についても良い」というルールに変更した。合わせて、ゴール付近のラインがはっきりとわかるように、再度白線を引きなおした。こうすることで、キーパーの阻止する行為が行いやすくなり、ゲームも比較的スムーズに展開し始めた。結局、児童Yは1ゲーム目で1点、2ゲーム目で2点をシュートすることができた。

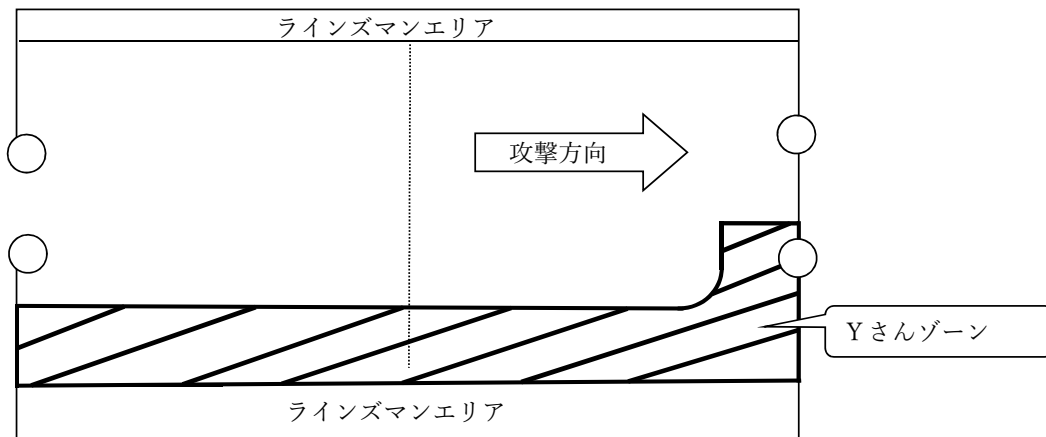


図6-2 ラインサッカー案2 (Yさんゾーン設定版)

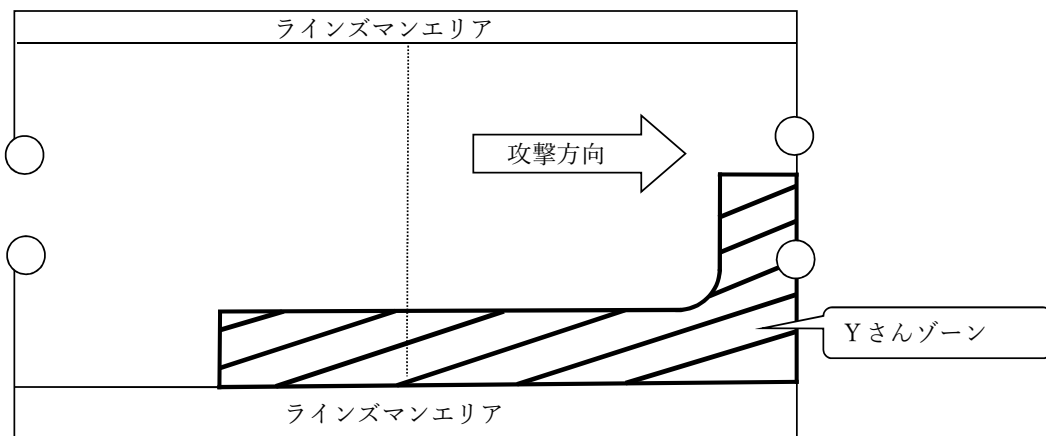


図6-3 ラインサッカー案3 (Yさんゾーン設定版)

## (6) タグラグビー

### 1) 主な指導・助言内容について

タグラグビーについては、指導・助言で訪問した最終日に1回のみ指導・助言を行った。実際に訪問した際には、教室ではクラス全員で児童Yがどうやったら共に活動できるかについて、話し合われている最中だった。児童Yは、体調等の理由で欠席していたため、タグラグビーには初めて取り組むということだった。

実際のゲームが始まり、準備体操後、タグラグビーのルール説明と、児童Yのために工夫された設定とルールもH教諭より発表された。内容は以下の通りで、このような特設ルールでゲームが行われた(図7)。

- ① Yさんゾーンを設定し、そのゾーン内には誰も入ることができない。
- ② 児童Yへのパスは、膝上にボールを置く。
- ③ 児童Yが膝上から転がして落とし、パスしたボールは味方しか拾えない。
- ④ 児童Yから受けたパスでトライしたら2点。

### 2) 指導・助言後の成果

実際のゲームを観察していると、しばらくは児童同士が激しくボールを奪い合ったり、走り回ったりする場面が続いた。しかし、しばらくすると「児童Yへパスして」といった声がきちんとあがり、児童Yの方へ1名の男児が駆け寄り、児童Yの膝上へボールをパスした。その後もう一度児童Yへパスされた。その後、児童Yがボールを転がして地面に落とすとすぐにチームメンバーが

ボールを拾った。しかし、拾った瞬間に敵チームがすぐにタグを取ってしまうため、拾ったボールを再びすぐ手放しては児童Yへすぐにパスするといった繰り返しが続いた。このやり取りに対して児童同士で笑いが起こり、とても楽しそうにゲームが展開されていた。

## 4. 本研究の成果と課題

本報告の中で取り扱ったサッカー運動について、児童Yはクラスのみならず一緒にサッカーができたことを大変喜んだようで、国語の時間に「うれしいな、はじめてできた、サッカーが」と俳句にし、記入した国語のノートを直接見せに来てくれた。この言葉を受けて筆者は大変感動した。児童Yは、これまでの体育では「見学者」としての時間を多く過ごしてきたことからすると、自らが「参加者」という立場で体育が受けられるようになったことが言え、ここに今回のインクルーシブ体育実践の成果があったと考える。

また、児童Yが在籍するクラスの児童にも大きな変化が見られた。指導・助言を始めた当初は、担任のH教諭の話をきちんと聞いたり、決められた場所に座ったりすることが難しい児童が多く見かけられた。そのような児童が、担任のH教諭の話をきちんと聞いたり、話を聞いていない児童に対して注意したり、おしゃべりをしないようになったりするなどした。また、児童Yがどうやったら一緒に参加できる体育ができるかについて、クラスで話し合いを持つ機会が増すようになった。

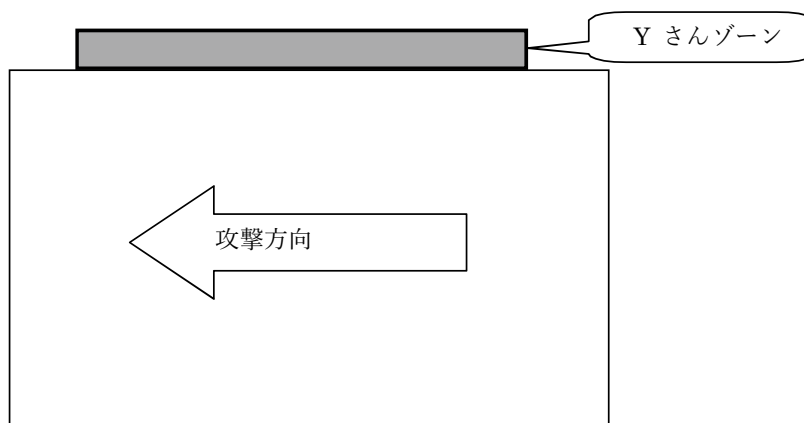


図7 タグラグビー案 (Yさんゾーン設定版)

た。このように、児童Yのことをクラスみんなで考えられる「思いやりの心」が育まれたことも大きな成果であるとする。

全ての指導・助言を終えた際、児童Yの保護者から、「心に大きな変化をもたらすことができたと思う」と言われた。保護者によれば、「児童Yは身体を動かすことは本来好きだったが、学校では怪我の心配があり見学をしていた。『自分には関係ない』といった後傾位の車椅子座位姿勢であった。しかし、今回の指導・助言を受け、共に参加できるようになったことで、車椅子で前傾位の座位姿勢に変わった。」と言われた。これは、児童Yが体育に対して受身ではなく、自ら意欲的になった気持ちの現れと言ってよいだろう。

現在、通常学級に障害のある児童・生徒は数多く在籍している。今回、筆者が指導・助言にあたったのは数多く存在する小学校の中の一人の障害のある児童に対する指導・助言である。筆者は、定期的に指導・助言を行ってきた中で、通常学級を担任する教師にとって、大勢の児童の指導を行いながら、肢体不自由のある児童が共に学べる環境を設定し、指導することの大変さや難しさを実感した。訪問する度に、小学校のH教諭と話し合いをしっかりと持ちながら、インクルーシブ体育実践に取り組んできたが、在籍する児童の実態や周囲の児童の実態も様々であるため、計画通りにいかないことも多く、その都度起こるケースに応じて柔軟に進めていかなければならなかった。課題の多い実践ではあるが、インクルーシブの方向へ向かっていくことを前提とした、柔軟性と創造性が指導のポイントであるとする。

ここで報告した内容はインクルーシブ体育の実践に限られてはいるものの、ここで扱った報告内容が、小学校の実践にとどまらず、より多くの学校に在籍する障害のある児童・生徒を対象とした実践へと拡大していくことを願っている。

## 参考文献

- 1) UNESCO, 1994, The UNESCO Salamanca Statement.
- 2) 長曾我部博, 2006, インクルーシブ体育における「まさつ」が子どもの相互理解に及ぼす影響, 障害者スポーツ科学, 4巻, pp.37-46.
- 3) 草野勝彦・長曾我部博, 2001, 障害児をインクルージョンした体育授業と教員の態度, 体育学研究, pp.207-216.
- 4) 草野勝彦ほか, 2007, 「インクルーシブ体育」の創造, 市村出版.
- 5) 加地信幸, 2006, 養護学校における体育の教授—学習活動に関する研究: 重度・重複障害児を中心に, 県立広島女子大学大学院生活科学研究科人間福祉専攻修士論文.
- 6) 加地信幸・辻内俊哉ほか, 2007, みんなが輝く体育⑦: 障害児体育の授業, 創文企画, p.10 及びpp.24-30.
- 7) 加地信幸ほか, 2010, 重度・重複障害児を対象とした運動・スポーツ活動に関する実践研究: ベンチ椅子座位によるアダプテッド・スポーツ実践について, 平成22年度広島県立広島特別支援学校研究紀要, pp.22-31.
- 8) 小林芳文, 2001, LD児・ADHD児が蘇る身体運動, 大修館書店.
- 9) 澤江幸則ほか, 2011, 体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容について: 非体育専攻学生との比較を通して, 障害者スポーツ科学, 9巻, pp.35-45.
- 10) 松原豊, 2003, 重度重複障害児の体育・スポーツ: すべての子ども達が体育・スポーツを楽しむために, 筑波大学附属桐が丘養護学校研究紀要, No.39, pp.124-128.
- 11) 矢部京之助ほか, 2004, アダプテッド・スポーツの科学, 市村出版.